

堀川恵子著 『原爆供養塔』

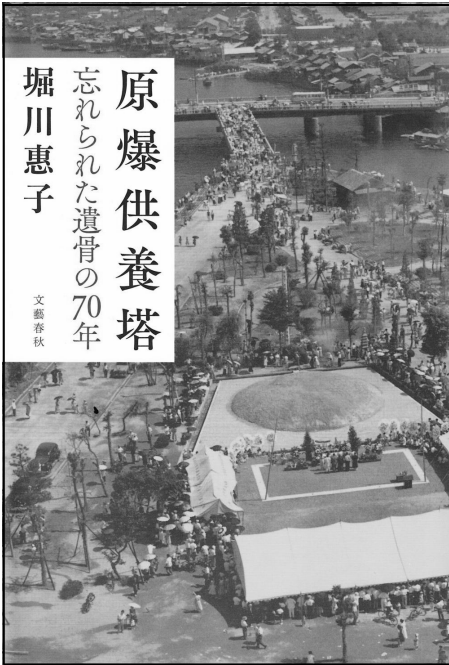
忘れられた遺骨の70年』

小沢節子

まず本書の構成（章立て）を示しておく。

- 序章
- 第一章 慰霊の場
- 第二章 佐伯敏子の足跡
- 第三章 運命の日
- 第四章 原爆供養塔とともに
- 第五章 残された遺骨
- 第六章 納骨名簿の謎
- 第七章 二つの名前
- 第八章 生きていた「死者」
- 第九章 魂は故郷に
- 終章

本書の前半は、原爆供養塔の成立、佐伯敏子（一九一九〜）の被爆体験と戦後の軌跡、そして著者と佐伯との出会いが語られる。



原爆供養塔
忘れられた遺骨の70年
堀川恵子

文藝春秋

引き取り手のない原爆被害者の遺骨「七万柱」（本書ではこの数字の脱神話化もおこなわれる）が納められた「原爆供養塔」を半世紀にわたって守ってきた佐伯は、だが、一九九八年に病に倒れ、現在では老人保健施設で過ごしている。後半は、二〇一三年に佐伯と再会した著者が、彼女に励まされながら、氏名が判明している八一人の納骨名簿を手がかりに遺骨に縁のある人を探す旅の記録Ⅱルポルターージュである。

佐伯敏子と「原爆文献を読む会」

本書は、二〇一五年に刊行された原爆関係の書籍のなかでも、もつとも人口に膾炙し、高い評価を得た一冊である。実際、それにふさわしい力作であるが、同時に、こうした在野の、あるいはジャーナリストの仕事に研究者はどのように応えるべきなのか、一方、ジャーナリストはどれだけ研究の蓄積から学んでいるのだろうかという思いにもとらわれた。特に本書前半の叙述からは、ともに原爆体験の継承をめぐる試行錯誤を真摯に重ねながらも、なかなか意識的に学び合うことのないジャーナリズムや市民運動と（広義の）アカデミズムの間の隔たりについて考えさせられた。

およそ被爆者の証言活動に関心を持つものならば、佐伯敏子の名前は、沼田鈴子や長崎の福田須磨子同様、記憶に刻まれているだろう。彼女たちの強烈な個性と被爆体験（被爆前と後の人生を含めての体験）の証言は、ジェンダーの問題、当事者の語りとそれを聞き取り代弁する非当事者との関係性の問題など、様々な現在の関心を喚起する。だが、たとえば、沼田鈴子については多

くの読み物や評伝の一方で、その思想と活動を理論的に分析し、考察するという研究者の作業は、管見の及ぶ限り、ようやく緒に就いたばかりである。佐伯敏子についても然り。彼女の被爆体験記や描き残した絵画に注目し、記録してきたのは一九七〇年代以降の市民運動の担い手たちだった。供養塔の骨壺を点検し遺骨を家族の元に返すという佐伯の作業を引き継いだ著者が、佐伯の被爆体験を改めて調べ直し、書き記す際に依拠したのも、「原爆文献を読む会」に集った人びとの記録だった。

一九六〇年代末から七〇年代にかけて活動した同会の軌跡は、原水禁運動や日本被団協（日本原水爆被害者団体協議会）の活動とは異なる位相で、五〇年代と七〇年代以降の運動をつなぐひとつの脈脈だが、私自身、長岡弘芳の回想のなかでしか知らなかった同会の具体的な活動について知ったのは、最近のことである（拙稿「原爆文献を読む会―会報に見る活動の紹介と再定置の試み」『原爆文学研究』一三、二〇一四年二月）。同会は長岡と中島竜美を両輪として発足し、やがて原爆文献を読むことに意義を見出す長岡と、被爆者との協働を志向する中島らとの間で分裂、長岡は同会を去る。分裂以前から、朝鮮人被爆者や原爆小頭症患者、福島菊次郎が被写体とした中村杉松など、高度成長の中で忘れられ取り残された被爆者の過酷な生へ関心を寄せていた主要メンバー（その中には被爆者、被爆二世、被爆者の配偶者もいた）は、被爆者支援の実践活動に踏み出し、佐伯と出会う。佐伯は、彼らが思い描いた主体的な被爆者像を体現する存在であり、その証言は原爆体験の極北を指し示すものと受け止められたのだろう、メンバーの一人鶴沼禮子が聞き取りをした佐伯敏子『十三人の死を見つめて』

(東京原爆文獻を読む会編、一九七二年)は、様々なヴァリエーションとともに全国に広がり、市民運動のテキストとなっていた。中島もまた、佐伯についての本の執筆構想を持ちつづけていたという。

著者は同会のメンバーや資料にアクセスする。結果として、同会の運動を引き継ぐことになったともいえるが、著者自身には、七〇年代の東京の市民運動の中で佐伯の存在が「発見」されていた経緯についての認識はないようだ。その結果、佐伯と戦後の被爆者運動、あるいは被爆体験の思想化をめぐる歴史的営みといった外部との関係性は、本書からは上手く伝わってこない。佐伯の活動もまた、そうした歴史的積み重ね・興行きのなかに位置づけられていくものだという理解は希薄であり、あくまで、その独自性の強調に終わる。これは、佐伯の被爆体験のありようを検証し、言語化してこなかった研究史の空白とも無縁ではないだろう。余談になるが、著者を囲む会での質疑応答で、佐伯の独自性とは何かについて質問した私に対して、著者はこう答えた——「佐伯さんは、話す／表現することで感情を対象化し、解放されるのではなく、言葉にすることで、体験から遠ざかっていく自分をそうではない側により追いつめていく、そういう被爆者なのだと思います(傍点小沢)。佐伯はトラウマ的な記憶と折り合いをつけない人生を自らに課してきたのだと、著者は言いたいのだろう。そうした佐伯の思想の構造を、私なりに言い換えれば、とりあえずは次のようにまとめることができるだろうか。

「一族十三人の死」は、原爆によって引き起こされた「個人的な大量死(との遭遇)」の経験にほかならない。自らの人生に襲

いかかったこの出来事を媒介にすることで、佐伯は原爆という大量殺戮(二〇世紀のメガデス)に向き合ったのであり、一三人の死と数十万の死は彼女の中で途切れることなくつながっている。自らの親族の無惨な死に取り憑かれつつ、悼みつづけた思いが、供養塔に祀られた数万の死者の一人ひとりを明らかにし供養するという非望を支えたのだともいえよう。

忘れられた被爆者と異物としての原爆供養塔

供養塔をめぐる新たな事実を著者自身が掘り起こしていく本書後半では、少年兵や従軍看護婦、沖繩出身の兵士、そして朝鮮人被爆者たちの知られざる経験が次々と明らかにされ、「読み物」としても圧倒的な面白さを放つ。たとえば、被爆直後に六万人分の死者の名前を記録するのは軍の関与がなければ不可能であったという指摘、瀕死の朝鮮人被爆者は日本名を名乗っていたために、(朝鮮人として)記録に残ることがなかったであろうという推論など、私自身も改めて気づかされるが多かった。こうした目からウロコが落ちる／落とす調査作業を進めていくにあたって、著者は公的な史料は必ずしも正確な事実や「真実」を伝えているわけではなく、史料の成立にまで遡って検証しなくてはならないことを、次のような佐伯の言葉から気づかされる。

「あの時、広島町の町は、そんな状態じゃあなかった。大勢の人が顔も分からんくらいになって、次々と邪魔にならんところに積み上げられて、それで焼かれていったんじゃないから。そ

れを全部正しく記録できることのほうが、おかしいよね」(二一六頁)。「戦後のデタラメの中で、どさくさまぎれになって、それで書き残されたもんじゃから、混乱の中で人間がやることじゃから、それは、おうとるほうが不思議よね。『中略』じゃから、まち、ごうとつて当たり前よね」(二一七頁)。

「原点から調べ直す」重要性に目を開かされたことで、文字通り、著者の視界は一気に広がる。これは研究者の言葉でいえば、史料批判の基本にほかならず、私にとつては大変共感できるものだった。それは、その方法論を見つけ出すにあたっての佐伯とのやりとりと、著者の姿勢への共感でもある。戦後／被爆七〇年目に刊行された多くの書籍では、いかにして戦争／被爆(原爆)体験を継承するかが問われたが、そのなかでも本書は、ひとりの被爆者の思想が、新たな担い手に受け渡される現場を生き生きと伝えたことで際立っている。

「知ってしまった人間はしらんふりはできん」という佐伯の言葉を受け止めて、著者は、今まで様々に語られ伝えられてきた出来事を改めて「物語」として提示することを、ジャーナリストであり、ノンフィクション作家である自らの責務と考える。たとえば、被爆直後の救援・遺体処理に当たった少年兵(全国から江田島に集められていた特攻要員＝特別幹部候補生)たちのエピソードは、本書の中でもっとも印象深い。生き延びた元少年兵を訪ね、調査を重ねることで、著者には未解決の、あるいは見えないままにされてきた新たな事実が次々と見えてくる。それぞれの出身地に帰郷した元少年兵たちのなかには、自分が入市被爆したことす

らも知らずに死んでいったものも多いという事実一つからも、今なお忘れられた被爆者の存在に気づかされた。

最後に、本書の書評に収まりきるテーマではないが、著者の遺骨調査の過程で広島市当局との確執がついてまわったという問題についても触れておこう。これはとりもなおさず、広島において、オフィシャルに追悼される原爆の死者とは誰なのか、そうした枠組みからはみ出す存在はどのように位置づけられてきたのかという問題にほかならない。本書ははからずも、原爆死者をめぐる、そして慰霊と追悼をめぐる理念の抗争の存在を浮き上がらせる。そのとき、原爆供養塔は、遺骨という大量死の実態／実体を納めるが故に、平和公園の中の異物としての相貌をもつて読者に迫ってくる。

(二〇一五年五月二六日 文藝春秋 三五九頁 一七五〇円＋税)